



発行日 2000年11月15日

発行人 藤川享胤 編集責任者 福島伸悦 編集委員 秋 央文・館盛寛行

発行所 SOTO禅インターナショナル事務局 〒164-0002 東京都中野区上高田1-27-6

Tel. 03-3361-0614 Fax. 03-3361-0634 URL: http://www.pa.airnet.ne.jp/szi

郵便振替 00100-6-611195 SOTO禅インターナショナル

Vol.18



グーリー・スナイダー 禅を詩う
奈良康明先生(右)との対談
(駒沢大学記念講堂)

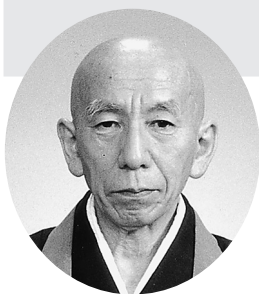
CONTENTS

- 巻頭 慕古の生活瑞応寺専門僧堂 堂長 檜崎通元..... 1
- 特集 永平寺ワークショップ
アメリカで生きる曹洞禅(上)ヴァレー禅堂堂頭 藤田一照..... 2
宗教人の第一の使命SZI会長 藤川享胤..... 5
- 旅行記 ありのままの中国
道元禅師の足跡を訪ねて〈PART2〉SZI事務局 菅原研州..... 6
- 海外レポート カウアイ島禅宗寺ハワイ開教師(カウアイ島禅宗寺) 板垣光昭..... 8
北アメリカ開教師 雑感(1)北アメリカ開教師(ロサンゼルス禅宗寺) 小島秀明..... 9
- SZI通信 曹洞宗の国際貢献が目指すべきもの秋田県長禅寺徒弟 博士(仏教学) 金子宗元.....10
国際公開講座速報SZI事務局 太田賢孝.....11
SZI動静報告11
- 会費納入者・寄付者リスト12

巻 頭

慕古の生活

瑞応寺専門僧堂 堂長 檜 崎 通 元



今年、我が道元禅師さまのご生誕八百年の佳辰を期して、宗風が世界規模に刮目される好因縁に相遇したことを敬仰します。これは単に宗門関係だけでなく、一般の識者が仏法や禅の生活を

話題にして、道元禅師さまの名だけでも出さねば纏まらぬとまで言われる時代です。

日本に生活する私達の身の辺の調度品、食材を見廻すと、その大半は国境を越えた世界市場から流通して、多くの国や人々のお陰で存在します。一方、環境も心もイビツになり、宇宙大に汚染した混沌たる地球の後生に、因果歴然の責を負わさぬ為の喫緊事態です。

医学、薬学の発達で難病に光明が与えられ有り難いことですが、宗教の場を埒外にして脳死問題、臓器移植の問題が進められています。日本の医師の中には「昔は神さまご先祖のお恵みで生きた信仰や気持ちが必要だった

が、現代は医療が進歩して人間の生も死も自由に調整できる」と、宗教的感覚を無視した発言が聞かれます。

地球は狭くなったという言葉通り、世界の世相の善悪が反映します。茲に於いて道元禅師さまの生きた禅仏法、正しい衣食住の有り方、生死の問題に就いての婆心切々のご指南は、世界の精神市場の大きな目標となりましょう。これはお釈迦様の少欲・知足のご遺教、托鉢の実践が現に脈々と受け継がれております。

熊本県菊地の聖護寺禅堂において毎夏“国際安居”を修行。先住一光和尚より承継して十年近いものですが、今年は瑞応僧堂の雲衲と欧米より参加の僧侶、役寮・講師を合して十余名。本会SZIの派遣黒柳博仁通訳の随喜もあり、禅堂の行持、清規の学習に精進しました。

海外に禅の国際センターが呼応して「禅の食生活」を提唱すれば、過食症や拒食症あるいは生活習慣病などの悩みは解決して、身心共に健康な明るい世界が誕生することでしょう。合掌。

特集／永平寺ワークショップ講演会ダイジェスト

アメリカで生きる曹洞禅（上）

マサチューセッツ州 パイオニアヴァレー禅堂堂頭 藤田 一 照



藤田一照老師

この度曹洞禅インターナショナルのお招きによりまして、道元禅師生誕800年のワークショップに講師として参加させていただきました。私のようなものが皆様の前でお話するのは本当におこがましいことなのですが、13年ほどアメリカで坐禅を続けている曹洞宗僧侶の変り種がいて、もしかしたらその話の中に何か参考になることがあるのではないかとこのところに一縷の望みをかけて、お話をさせて頂きたいと思います。「アメリカで生きる曹洞禅」という題を頂きましたが、私の場合はそんなかっこいいものではなくて、「アメリカでどうにかこうにか生き延びている曹洞禅僧侶の一事例」とでも言ったほうがより正確なのではないかと思っています。

さて、皆さんはどういう動機でここに修行にこられたのでしょうか。またどういう展望を持ってここでの日々を送られているのでしょうか。今後長い人生を送るにあたって、ここでの修行をどういう位置付けられるのでしょうか。私は在家の出身で学生からそのまま僧侶になりました。駒澤大学とかその他の仏教系の大学を出ていませんので仏教学を系統的に学んだ人間ではありません。修行したのも安泰寺という普通の寺院とは大分様子の違う所でしたし、その上いまでは日本での修行年数の倍近くをアメリカで過ごしております。ですから正直に言って、宗門の僧侶としては、全く常識と素養を欠いておりまして皆さんと比べれば全く非正統的な僧侶なんです。では、どうしてそういう道に入ったのかと言うことをよく聞かれるのですが、その辺から話を始めたいと思います。

私は学部および大学院で発達心理学を勉強していました。子供がどういうふうにして大人になっていくか、

人間が成長するとはどういうことかということ、自分の問題として知りたかったのです。それとの関連で、心理学だけでは飽き足らずに、合気道だとか、野口体操なども割と熱心に学んでおりました。そのうちに漢方医学の師に会いまして、その師匠から、あなたには坐禅が必要だから鎌倉円覚寺の居士林に行って手ほどきを受けなさいと言われました。それで、なんの予備知識もないままに、そこの学生接心に参加したわけです。痛い眠いつらいと言う惨憺たる一週間を送ったわけですが、不思議なことに、こういうことをいまの自分はやらなければならないと痛切に感じまして、それ以後学生生活を続けながら、都内の臨済宗の禅寺の参禅会だとか、円覚寺の学生接心だとか、武蔵野にありました般若道場という在家の会だとかに、時間のある限り通うようになりました。やればやるほどこれはパートタイムでやっていたのではだめだ、ぜひともフルタイムでやりたいと考えるようになりました。すると不思議なもので、色々な縁にめぐまれて、それから一年ちょっとの後には、頭を剃って安泰寺という寺に暮らしている自分になっていたのです。結局28歳の時に大学院を中退しまして、そのまま安泰寺に入って翌年得度しました。その時には将来、職業としての寺の住職になることは全く考えていませんでした。ただ仏弟子の片隅に加えていただいて、坐禅の行者として一生を送ろうと、そういう覚悟をつけるつもりで頭を剃ってもらったのです。戸籍上の名前も、いただいた僧名に変えました。これまでの人生に区切りをつけて、すっきりご破算にしてゼロから出直そうと思ったのです。

安泰寺に行くことになったのは、当時参禅していた臨済宗の福富雪底老師、現在は大徳寺の管長さんをされておりますが、当時は練馬の広徳寺の住職をされていてその方に相談したのです。フルタイムで思いっきり坐禅をしたいので、どこかいい僧堂を紹介してくれと。すると「あなたは職業としての僧侶になるつもりはないのでしょうか。坐禅の修行がしたいのなら、普通の僧堂はなかば職業訓練所みたいになっているから、あまりすすめられない。聞くとところによると、曹洞宗で安泰寺というところがある。そこは坐禅が思いっきりできるところのようだ。私は実際に行ったことがないので責任のあることは言えないが、実際にあなたが行ってみて自分の目で確かめて、そこが合うようであったならば、そこへ行って坐りなさい。そこが合わなかったならば、韓国の山の中の僧堂を紹介しよう。そこならば嫌と言うほど坐れるよ」と言われました。そこで

安泰寺に下見に行ったのです。そこは檀家が一軒もなく、自給自足に近い生活を山の中で営みながら、沢木興道老師や内山興正老師が唱導されているような只管打坐の修行を守りつづけているところだったので、私にはうってつけで「ここだ！」と言う感じを持ちました。その後じかにお会いできた内山老師からは「まず黙って十年そこで坐りなさい」と言われましたので、そのつもりで参りました。

先程どういう展望を持ってここにおられますかとお聞きしたのですが、私の場合は、十年後か二十年後かわからないけれども、いずれしかるべき時が来たら安泰寺を卒業して、どこか山奥の農家でも借りて、托鉢しながら坐禅をして暮らそうという展望を持って修行していたのです。私としてはまだ当分は安泰寺にいるつもりでいたんですけれども、ある時師匠から、「お前の先輩が建てた禅堂がアメリカにあるから、そこに行って修行を続けてみないか」と言われました。その坐禅堂のことは前から聞いておりましたけれども、「へーそういう先輩がいるんだ」と感心するくらいのことでした。そのとき思いがけずそういう誘いをうけて、あまり考えもしないで、躊躇もあまりなしに「私のようなものでよければ行かしてください」と答えてしまったのです。もっとも後で後悔が始まることになるんですけど。「自分のような修行途中の者がそんなところに行ってもなにも役にたたないんじゃないでしょうか、教えることなんて何もありません」と言いますと師匠がこういったんです。「何も特別なことはしなくていい。ただ自分の修行をそこで続けなさい。お前ががんばって教えようとしてもどうせろくなことにはならない」内山老師も「正法眼蔵の行持の巻にある達磨大師の章の精神でやりなさい。達磨大師は布教活動など目立ったことは何もしないで面壁していた。その精神でおればいい」と言われまして、それなら自信はまったくないけれども、ともかくやってみようということで、渡米したのです。そのときの私は、信者を増やそうとか、ヴァレー禅堂を組織として大きくしようとかということとは全く考えておりませんでした。アメリカを旅行者



藤田一照老師 ご家族

として訪ねてちょっと見聞をひろめるとか、日本からの土産話のように禅のことをちょこちょこ話して帰ってくるということではなくて、長年そこに住み込んで、そこに暮らしている人たちと同じ空気を吸って、同じ生活の困難さを味わって、その中で坐禅をして暮らすと言うのはどういうことかを、実体験を通して考えてみよう、手持ちの答えはないけど、手探りでさぐってみようと言うくらいの気持ちで行きました。坐禅中心の生活と言うのは、置かれた場所によって独自の形が出てくると思うのですね。ヴァレー禅堂ならヴァレー禅堂なりの、そこにふさわしい曹洞禅の表現の仕方があるのではないかと。それを見つけに行こうというくらいの気持ちで行きました。もう一つは、曹洞禅のなかにはまだ表に出ていない隠された未知の可能性があるとは思っていましたので、違う文化の中でこそかえってその可能性を発見できるのではないかと期待をもって行ったのです。まず十年はとどまろうと思っていました。

私が1987年から住んでいるヴァレー禅堂というのは、安泰寺とアメリカの小さな禅グループが協力して出来た小さな、手造りの本当にささやかな坐禅堂です。アメリカの東海岸のマサチューセッツ州の西のはずれにあります。雑木林の中にぽつんと建っている禅堂ができたのは30年くらい前で、不思議なことにもなくなりもしないが大きくなりもしないで今日に至っています。設立当初からの方針で、会費も何も取らないし、会員制にもしない、宣伝もしないということでやってきました。口コミで、ぽつぽつと人が来るのにまかせています。食いつなぐために、何でも屋をしながら暮らしていますので毎日が綱渡りのようなものですが、幸いなことに必要な時には必要なだけの助けがどこからかやってきて、今までなんとか存続できています。檀家が一軒もない小さな山寺をイメージしていただくいいと思います。坐禅堂はありますが、10人坐ればいっぱいになってしまうような規模のもので、簡単な台所と食堂、それに参禅者が雑魚寝するような部



講演会聴衆の皆様

屋が一つあるだけです。そういうところでどのようなことができるかという宿題を背負いながらやっているのです。アメリカ人の友人の中には、もっと大きな町に引っ越してやったほうが人が集まっていいよといってくれる人もいますし、会員制にして会費をちゃんと取ったほうがいいよと言ってくれる人もいますが、どうも私が習ってきた坐禅とそういうやりかたがどうもしっくりこないような感じがするんです。先のことはわかりませんが、今のところはこういうやりかたで行こうと思っています。

日本という文化の中で育まれ日本曹洞宗として伝承されてきた禅を、それとは異質なアメリカ文化のなかにどうやって伝えて、根付かせていくか。そこにどんな意義や意味、困難或いは課題があるのか。またそれらをどう捉えて乗り越えていくのか。更には求道心に燃えてやってくるアメリカ人の修行者を、日本の曹洞宗として例えばこの永平寺でどうやって受け入れ、導いていくか。既にもう活発に活動している曹洞禅を標榜する禅センターや禅グループが海外に一杯あるわけなんですけれども、彼らとどのように連携していくのか。どういう関係を持っていくのかこういうことがすでに今現在の切実な問題として存在しています。さらに今述べたのは主にヨーロッパ系のアメリカ人、つまりユダヤ教やキリスト教の宗教伝統の中に生まれ育った人々で、改宗とまではいなくても、自覚的に自分の選択によってあえて仏教に関わりを持っている人たちですが、アメリカで曹洞禅に関わっているのはそれだけではありません。それは日系の人たちであり海外の日系の人たちを相手する寺院です。むしろ歴史としてはこっちのほうが古いんです。そこが抱えている重要な問題もいろいろとあるのです。これらの諸問題は対処療法的に、小手先だけで解決しようとしても埒があかない、根本的で思い切った解決を待っています。日本国内に目を向けてみても、宗門として早急に解決しなければならない切実な問題が今ここにあるということは、よく承知しておりますし、多くの方々がその問題に取り組んでいらっしゃることも知っております。「曹洞宗としてはいま、海外の問題にかかざらわっている余裕などないのではないか。それよりまず本家である日本の曹洞宗を建て直すことが先決なのではないか」という声もあります。海外の問題に取り組むと言うのは、日本での過去の前例をそのまま使えない全く新しい問題ですので、よっぽど足元をしっかりとしてからでなければ、下手に手をだすのは危険だということが確かにあると思います。従ってまず国内の問題、それから海外だと言うのもひとつの考え方であると思いますけれども、ここで前提とされている国内の問題と海外の問題は別な問題であるというのは考えなおしてみたほうがよいのではないのでしょうか。私はその二つは切り離せない問題だと思っています。ここ数10年位の日本社会や世界の変化のスピードは眼がくらむほ

どです。いまいった海外と国内のさまざまな問題の根底には共通してその変化に宗門がついていけない、うまく対応できていないということがあるのではないのでしょうか。むしろ海外の方がそのことが先取りされて、もっとはっきりした形で出てきているといえます。もしそうだとすれば、海外での問題は国内の問題に取り組むうえでの絶好のモデルケースになるでしょう。そして海外の問題を真正面からとりあげ対応しようという努力は、宗門の持っている底力のまたとない試金石になるのではないかと。異文化との出会いと言うのは、常にチャレンジ（挑戦）ですし、クライシス（危機）でもあります。やり方によっては大きなチャンス（好機）ともなります。異文化との出会いを生かすことができれば、曹洞禅の中に可能性として眠っているようなものを掘り起こして活性化していくことにつながっていくのではないかと。国内の僧侶の数に比べると、海外のいわゆる開教師の数はほんの僅かで、その方たちの苦労はこれまで単に海の向こうで物好きがやっているよそ事のような感じで考えられており、日本にはほとんど情報さえ入ってこない状態であったかと思います。しかしこれからは、海外の問題と国内の問題はそんなに別な問題ではなくて、同じ問題の違った現れ方なのだという認識にたって、海外の問題も宗門の重要課題としてきちんと注目してひろいあげていただきたいのです。まだまだ海外の問題は宗門の共通認識まで至っていません。アメリカにいる開教師同士の交流ですらつい最近始まったばかりで、それ以前は誰がどこで何をやっているかということさえお互い知っていなかったのです。『宗報』に海外の出来事が掲載されるようになったのはつい最近のことです。この会を主催してくださった曹洞禅インターナショナルもそうした問題意識から作られているわけで、日本と海外のパイプ役として、今後益々宗門にとって重要な役割をになっていくと思います。

（次号へ続く）



永平寺ワークショップ集合写真

永平寺ワークショップ・SZI会長挨拶

宗教人の第一の使命

SZI会長・山形県般若寺住職 藤川 享胤



藤川享胤会長

この度御本山の特別のご配慮をいただきまして、SZIのワークショップを祖山で取り上げていただきましたことにまず御礼申し上げます。そして只今は副監院老師より大変ありがたいお言葉をいただきまして、私たち開教師の先輩の示寂の供養、そして寺族並びに縁者のご供養のご導師をお勤め下さいましたこと、改めて感謝申し上げます。

私は先月の末から約3週間アルゼンチンに行き、世界の人々と次世代の青少年の育成についてディスカッションをして参りました。その席上、私は世界の人々に、今の日本、日本人を皆さんはどのように見ていらっしゃるのかをお伺いいたしました。世界の人々は日本人を確かに不況とはいえ、経済の面ではいまだトップクラスと認識しております。しかしながら人間としての評価は残念ながら二流以下です。なぜでしょうか。それは多分、戦後50有余年、私たち日本人の生き方、日本人の人生の価値観に大きな誤りがあったからではないかと受け止めるわけです。これまで私たちは物事の判断をするにあたって行動の基準をあまりに損得の面に委ね過ぎて参りました。これをすることが自分にとって得か損か、自分の会社にとって損か得か。資本主義の自由競争の名を借りて、儲かるためなら何をしてもいいという考え方が、いつの間にか私たちの心の中に居座ってしまいました。実業界の世界だけではございません。その波は教育界にも押し寄せました。有名小学校、中学校、高等学校、大学、そしていい会社に入ること、出来るだけ多くの年収を得た人が人生の勝利者であり、それが人間の幸せに直結すると錯覚して参りました。宗教界とて

例外ではございません。僧侶は己の人格を磨き、法を説くことによって、大衆を教化すべきなのに、今や日本では大部分が単なる葬式仏教、法事仏教に陥ってしまいました。宝を天につめというのがイエスキリストの教えだったはずですが、ローマカソリック教会は権威を傘にして組織を膨張拡大してゆくにしたがって、凋落の一途を辿り始めました。ついに教会建設の資金集めに免罪符を発行するに至って、ここに宗教改革の火の手が上がり、プロテスタントという新興宗派が誕生するのを見たのであります。日本仏教界の墮落も結局はお金という魔物に取りつかれたのであります。お金によって等級をつける戒名料というのはまさに免罪符そのものではないでしょうか。20世紀、私たちが行動する基準を損得に置いた為、残念ながら私たちは社会からの信用を失墜させてしまいました。威儀即仏法、作法是宗旨という金看板に安住して、我が身が光り輝く努力を忘れた仏教界は果たして21世紀に生き残れるのでしょうか。さすれば21世紀、私たちはどんなスタンスをとって生きていけばいいのでしょうか。何を心の糧にして生きねばならないのでしょうか。私は私たち各々がこのことは善いことなのか悪いことなのか、しても善いのか悪いのか、私たちが思索したり、行動したりするときの判断の基準を今、損得から善悪に切り替えねばならないと思っています。善悪を判断する厳しい眼を我が身に作り出すこと、そしてその眼の育成を大衆の皆さんに範として示したいということを訴え続けることが21世紀に生き残る我々宗教人の第一の使命であると確信するのであります。この永平寺でのありがたい修行を終え、厳しい現実の社会に戻ったとき、本当に社会の認知を受けられ、世界に通用する宗教家の育成のために、我々曹洞禅インターナショナルは全力を尽くしていくつもりであります。どうぞ皆さん、ここでの修行が終わって、師寮寺に戻られたときに、私たちと一緒に21世紀の宗教界を作っていきたい。そう念じ、今日ここに来させていただきました。

本日、マサチューセッツから藤田一照老師をお迎えいたしました。「アメリカに生きる曹洞禅」という名のもとに、皆様に力強い勇気を与える言葉もあろうかと思えます。どうぞ藤田一照老師のご講演最後まで熱心にお聞きいただきますことを心よりお願い申し上げます、私の挨拶といたします。ありがとうございました。

旅行記

～ありのままの中国～

道元禅師の足跡を訪ねて〈PART 2〉

SZI事務局 宮城県城国寺 菅原 研州



西安 兵馬俑にて

このたび、9月7日～9月12日まで、駒澤大学副学長大谷哲夫教授を団長とした「ありのままの中国―道元禅師の足跡を訪ねて〈PART 2〉―」ツアーがJTB教育旅行東京西支店主催・SOTO禅インターナショナルの賛同で行われました。SZI事務局からは浅井宣亮師と菅原が同行し、総勢は19名でした。

本ツアーは昨年の三月に引き続いて二度目となりますが、旅行の副題からもおわかりいただけるように、道元禅師が中国（当時は南宋）で正師（仏法を正しく伝える師匠）を求めて、広大な大地を遍歴し修行された道々を訪ねてみよう、というのが主旨となっています。特に今年は道元禅師御生誕800年ということもあり、報恩旅行としての趣もありました。

さて、初日は移動日。道元禅師が明州（現・寧波市）を中心とした中国南方を歩かれた足跡から少し外れて西安（長安の都）にまで羽を広げました。しかし、その前の東京から上海の移動の際には少し考えさせられました。道元禅師の頃はおそらく一月は船に揺られたことでしょう。古い伝記にも船中での苦労話が記されています。さらに『正法眼蔵』『嗣書』卷には船に因縁した話があり、道元禅師が敬愛していた大梅法常禅師が、平田の万年寺に住持していた元熏和尚という人の夢に現れ、「船の舷を越えてきた真実の求道者が来たら、仏法を惜しむことがないように」と言われたため、道元禅師が嗣書（仏祖の系譜が書かれたもの）を拝見する機会に恵まれたことを述べておられます。

もっとも、現在の旅の道程を表現するとしたら「万里の波濤を越えて」と言うよりもむしろ「雲海を眼下に見て」というのが正しいでしょう。しかも旅といっても時間は東京・上海間が飛行機でたった140分。何の苦労ありません。それを時代の変遷と片付けてしまうのは簡単ですし、あえて苦労をするべきだ、というつもりありません。しかし、真実の修行をするために必要なことであれば何でも行い、何処へも行くという気概だけは失わないようにしたいものです。飛行機があるのならば飛行機で、それが遍歴ということではないでしょうか。

二日目、西安見学。主を失ってから既に2200年、それでも彼らは未だに命令を待っていました。まさに大威容、そうした表現がふさわしい大軍団がそこにありました。180cmを超える巨人兵、戦車を曳いて見えない敵を目指している軍馬達。そして、かれらを率いる將軍達はいまだに吉凶を占い戦に備えています。今にも自らの存在を暴いた我々に向かってくるかのような圧倒的なリアリティ、そしてそれを支える底知れぬ力。悠久の時を越え、世界8番目の奇跡といわれる兵馬俑です。『史記』を通じて中国古代史に親しんだ人であれば、その歴史を目の当たりにし、感動を通り越え畏敬の念すら感じることもできるでしょう。

五千年という歴史を持つ中国でも最初の皇帝である秦の始皇帝は、自分の陵墓を護るという目的のためだけにあれほどの軍隊を地中に配備しました。これは当時の秦という統一帝国が強大な国力を持っていたことを示すものであり、それを自分のためだけに使うことができた始皇帝の権力は、まさに“天子”の名にふさわしいものでしょう。始皇帝は『史記』からうかがえるようにドラマティックな事件が相次いだ人で、近年「始皇帝暗殺」という映画が製作されたことから、未だにその魅力が失われていないことを示しています。いや、むしろ兵馬俑が現代に発見されたからこそ、我々と始皇帝の間にある2200年という時の隔たりが失われたのでしょう。項羽や英布という將軍達が、兵馬俑の兵士が持つ武器を狙ったという話を聞けば、今自分が立っているところに項羽が立っていたかもしれないと思い、本当に得がたい経験をすることができました。

もっとも、歴史の主人公に会うことが出来なかったのは残念ですが。



普陀山潮音洞にて

三日目の午後には杭州に着きました。杭州では信号とは名ばかりで機能せず、人、自転車、自動車、勝手気ままに交差点を往き来しています。私はこんな都市に交通規則があるのか、と思っていましたが、ガイドの王さんから解説が入りました。「勇気のあるものが優先される」と、妙に納得してしまうコメントです。そして、その日の夜、五時間かけて天台山へ着いた途端思いました。「もっとも勇気があったのはここまでバスで来た我々ではなかろうか」と。ただ、その状況を詳しく書いてしまうと次回の参加者が激減しそうなので書きませんが……。

四日目の午前中は天台宗の総本山である天台山国清寺の見学です。道元禅師の記録には直接国清寺に来了という記事はないのですが、道中立ち寄っていたのではないかとされています。隋（600年頃）の時代からある塔を見学し、道元禅師もこれを見たかも知れないと思い、感慨もひとしおです。

午後には杭州に戻り、そこからフェリーで普陀山へ渡りました。普陀山は唐の時代に日本から来た慧鑒という僧が帰国の際に観音像を持って帰ろうとしたところ、日本へ行くことを厭がり、ついに普陀山から先に進まなくなったそうで、慧鑒はそこに観音像を祀り、寺を建立しました。観音像は「不肯去観音（去くことを肯わず）」と呼ばれ、普陀山は中国でも有名な観音霊場として現在でも信仰を集めています。

道元禅師は間違いなく普陀山を訪れています。観音信仰を持っていたとも言われる禅師がここで詠んだ偈頌（仏教的な漢詩）は『永平広録』（巻十・28・45、玄和尚偈頌）に収録されており、「潮音洞」という海の断崖絶壁にある洞窟のなかに観音の聖顔が見えるという伝説に対し、目で他に観音菩薩を追うことを戒め、自己こそが観音であることを示されています。現在でも「潮音洞」はあります。道元禅師と同じものを見ることができたのは本当にありがたく、禅師と全く同じところに立っていたのではないかという喜びに、歴史を感じることができました。そして今回の旅行の主旨が最大に発

揮された瞬間でもありました。おそらくこの体験はいつまでも心に残り、岩にあたる波音を聞くたびに思い出すことでしょう。また、同じ普陀山にある普済禅寺を見学したときにはちょうど晚課の時間で、中国の読経を聞くことができました。元の時代以降中国は、念仏禅になってしまったそうですが、確かに我々が唱えるお経とは違い、『阿弥陀経』に節がつき、まるで歌を謡っているようです。普済「禅」寺で、浄土經典とは不思議ですが、これこそが念仏禅なのでしょう。大衆の雰囲気も日本とはずいぶん違いますが、大陸ならではののかな？ そんなことを考えながら普陀山を後にしました。

五日目浙江省寧波。ここには道元禅師が訪れた旧跡が多くありますが、今回はその中でも阿育王寺と天童山を訪問しました。残念なことにどちらも当時の面影はありませんが、中国の寺院がどういったものだったのかを知ることはできます。阿育王寺では大衆が何か法要を行っていたようですが、時間がなく見学はできませんでした。そして、雨中の天童寺では昨年植樹した松が2本とも一年の時間が経ったことを示していました。是非ともこのまま成長して欲しいものです。今年も道元禅師が修行された古天童には行くことができませんでした。古天童は伽藍が整っていないらしいですが、是非その風景を見てみたいという思いが強くなります。次回こそは一日かけてでも訪れたいものです。

こうして昨年に引き続いて行われた「ありのままの中国～道元禅師の足跡を訪ねて〈PART 2〉～」ツアーでしたが、参加された方々はそれぞれ何らかの想いを胸に抱かれたことと思います。私は歴史の時間にふれた気がして、不思議な感覚でした。

さて、何時かはわかりませんが次回があるそうです。そうした機会を期待しつつ以上で私からの旅行記は終わります。



阿育王寺にて

ハワイレポート カウアイ島禅宗寺

ハワイ開教師（カウアイ島禅宗寺） 板垣 光昭

カウアイ島はハワイ諸島の中では地質学的に一番古くて、自然は奥深く別名「庭園の島」と言われる島です。島の中心部には世界でもっとも雨の降るワイアレレがあり、この山を中心に鮮やかな緑が生い茂り清冽なる滝が流れ、島全体が箱庭のような美しさを持った島です。そんな為か、映画のロケで使われた処が沢山あり、何となく何処かで見たような風景によく出くわす島です。そして、禅宗寺が位置しているのは比較的雨の少ない島の南西部で、砂糖黍畑とコーヒー畑が広がる地域です。この地域は日本からの移民が多かったところで浄土宗系2カ寺、西本願寺系3カ寺、東本願寺系1カ寺、高野山真言宗系1カ寺そして曹洞宗系1カ寺と人口の割には日系開教寺院が多い地域になっています。ただ、砂糖黍産業の斜陽とそれに取って代わる産業がこの地域に根付かなかったために、ベビーブーマー世代以降は職を求めてホノルルや米本土に移り住んでいる人が多く、日系人社会は過疎・高齢化の傾向です。実際、禅宗寺のメンバーも戦後日本から嫁いできた人を抜けば一番若い人で70歳は超えており、子供が同居もしくは同島内に住んでいる人は多くないようです。

禅宗寺は、マックブライド砂糖農園の閉鎖に伴って1978年に現在のハナペベに移転して来るまでは、農園内の最大居住区だったワヒアワキャンプ（最大約350世帯）の中に在ったお寺です。歴史的には1903年2月に、同胞慰問使として両大本山より派遣されてこられた広島県豊田郡長谷村耽源寺住職、管良雲老師（来布時46歳）がこの地域に同郷の移民が多いことを知り、錫を留められて教化を始めたのが開創の所以だったようです。その後第二次大戦で開教師が抑留された時期をはさみ13人の開教師によって法灯を護持してまいりました。縁があってこの禅宗寺に11代目の開教師として家族共々赴任してきたのは昨年の4月初旬です。前任者三好晃一先生、現南米総監の離任から数ヶ月が過ぎての着任でしたので引継ぎが上手く行かず、当初は全てが手探りの状態でしたが何とか2年目を迎えております。

さて、この禅宗寺で7月29日に結制を厳修いたしました。今更ハワイに結制は不要という向きもあるかもしれませんが、メンバーに帰信意識を再認識して頂くこと、またマンネリ化しつつある教化活動に新たな活路を切り開く為にも一つの刺激剤としてあえて修行いたしました。西堂には禅宗寺駐在開教師として在任経験のある松浦玉英前総監老師を拜請し、首座にカナダ人の大慈ベイエ師、書記にノルウェーから宗禅ラーセン師、両班にフラ

ンスから霊源オリビエ師、弁事には息子の有悟、それに法類の綿貫円了兄、法友の大島英信師にも法援を頂き、その上に友人の三浦享子さん（大本山總持寺日曜参禅会会員）も駆けつけて下さって無事円成することが出来ました。日本と事情が違ふこと、他寺院へ迷惑を掛けたくないこともあり晋山式は修せず、松浦老師に導師をお願いし歴代開教師諷経・檀信徒総回向を併修いたしました。

結制のような伝統的な行持に、カウアイ島までヨーロッパやカナダから僧侶が駆けつけて来ること、そして自分たちのお寺の宗旨が世界中で受け入れられていることを知ってメンバーも驚いたようです。また、仏教が葬式や法事の為だけでないことを現実的に知ったこともいい刺激になったようです。伝統行持を行ったことで、メンバーが帰信意識を少しでも深くするのに役立ったと思います。

このレポートは詳細には渡っていませんが、現在開教活動の真只中に身と置いているものとして強く感じていることは「照顧脚下」です。開教活動を実践していく上で現地の文化なり言語なりを良く知ることはとても大事なことで、重要なことですが、その前に何を伝えに來たのかを深く再確認する必要があると思っています。

追記

再会を急ぐ必要はないのですが、当日参列して下さった他宗の開教師からの薦めもあって、この12月10日に行われるカウアイ仏教連盟主催の成道会の折に、今回両班を引き受けて下さったフランスの霊源オリビエ師を首座に再会を計画中です。日本からの成道会法要随喜ツアーも企画中です。詳細は、SZI事務局まで。



カウアイ島禅宗寺法戦式

北アメリカ開教師 雑感（1）

北アメリカ開教師（ロサンゼルス禅宗寺） 小島 秀明



創立75周年記念撮影（1997年）

カリフォルニアの年中青い空の下、禅宗寺が創立されて七十八年になります。私はここロサンゼルス禅宗寺で、その僅か十五分の一の時間を開教師と過ごしてきました。

曹洞宗教化研修所（現曹洞宗総合研究センター研修部）に在所中、私は秘かに都市開教を志していました。そのケーススタディーとして海外研修の場をロサンゼルス日系寺院である禅宗寺に求めました。今後日本の都市部で加速する家の宗教から個人の宗教への移行が、個人主義を基本とするアメリカにある日系の寺院では既に混在しているのではないかと当時考えたからです。いわば近未来の都市開教のモデルケースとしての興味でした。そして七年前に半年間の研修を禅宗寺で送らせて頂きました。そのとき出会った開教師方、日系社会に生きるメンバーさん、坐禅会に来る多様な人種の人、などなどロサンゼルス禅宗寺を取り巻く「人間」に結局魅了され、願って開教師として再渡米しました。

当初家族には四年という約束で来たのですが、実際に開教師として現場に立っているうち、考えが大きく変わってきました。自分がここで開教師として、やりたいことを形にするには、少なくとも二十年、いや三十年はかかるな、そう思い出しました。開教師とメンバー（信徒）が一緒に汗を流して、苦しんだり、問題を解決したり、歓喜したりしながら、お互いに人間性を肌で丸ごと受け入れあっていくのが布教の最善の道だと感じ始めたからです。

移民の国アメリカの中でも、禅宗寺の位置するロサンゼルスは外国からの移住者が多い都市です。人種のるつぽと形容され、話されている言語にしても、200種を超えと言われています。一見、様々な人種が溶け合っ

て生活をしているかのように見えますが、実際には住む地域や収入格差など、様々な面で人種の偏りが目立ちます。殊に宗教はそれを顕著に現します。日曜日に教会を覗くと、アフリカン・アメリカン（黒人）はアフリカン・アメリカンの教会、コケージョン（ヨーロッパ系白人）はコケージョンの教会、メキシコ系はメキシコ系の教会へ、韓国系は韓国系の教会など、同じキリスト教でも寺院によって特定の人種の色が濃いです。同じように禅宗寺も日系の人々の心の拠り所となる寺院として設立されました。

日本人または日系人で、たとえ日本文化や日本人と離れ、仏教とも無縁に生きてきた人でさえ、葬儀の段になると仏教で送って欲しいと願う人が多くあります。宗教がアイデンティティーの重要な部分に位置し、禅宗寺もまた、それを支える重要な役目を担っていると痛感します。

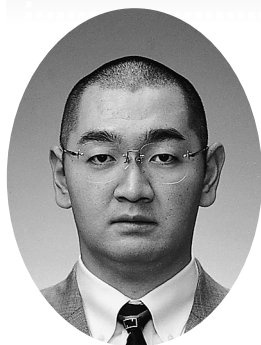
しかし、それとは逆に週に三回の坐禅には非日系の方々も多く集まります。人種も年齢も国籍もまちまちです。言葉、文化、人種の違いの中で仏教を中心に両者と接していると、仏教または禅の普遍性を自然に感じます。仏教とい形の中に掬われた生きる智慧は、葬儀法事や文化が主体の日系でも、坐禅を入り口とする非日系でも、言葉の壁があっても、その人間の心に必ず共鳴する、そういう確信が、私の中に生まれ、私の開教生活の後ろ盾となっています。日本における布教も海外開教も英語か日本語かの違いだけで、本質的に全く同じだと思います。ただ、海外の場合、文化背景が大きく違い、違いすぎる分、共通点や普遍性を見出しやすいのだと思います。それが私自身の仏教参究の大きな手助けをしてくれています。ここでの開教生活は、自分自身が求めている仏教の本質というか、人間が生きるこのと根本を、たくさん悩み、肌で感じ、またその喜びを糧とする生活でもあります。



お盆カーニバルで賑わう禅宗寺

曹洞宗の国際貢献が目指すべきもの

秋田県長禅寺徒弟 博士（仏教学） 金子 宗元



この原稿の締切間近、8月28日、国連本部では、NGO主催の「宗教・精神指導者の世界平和サミット（World Peace Summit of Religious and Spiritual Leaders）」が開催され、29日には、アナン事務総長によって、21世紀には宗教的偏狭さや不寛容

を許してはならない事が強調され、世界の精神的指導者、即ち、この会議に参加している世界中のキリスト教・仏教・イスラム教やロシア正教、ユダヤ教等の宗教指導者等1,000人に対して、異宗教間の対話と協力の模範を示すよう求める演説が為されている。

その国連が、1994年12月の第49回国連総会にて採択したものが、「人権教育のための国連10年（1995～2004年 United Nations Decade for Human Rights Education）」であり、この2000年1月からは後期5カ年がスタートしたわけである。この国連採択への流れに先導的役割を果たしたものは、その前年の3月にユネスコ主催のカナダ・モントリオール国際会議で採択された「人権と民主主義のための教育に関する『世界行動計画』」であり、その中では以下の様に指摘されている。「確かに冷戦は終結し、いくつかの壁は壊され、独裁者たちは打倒された。しかし、20世紀末の10年は、ナショナリズムの台頭や人種差別主義、外国人排斥、性差別、宗教的非寛容によって引き起こされる極めて深刻な人権侵害の再現を経験しつつある。このような再現は、女性に対する組織的レイプを含む民族浄化、搾取、子供の遺棄や虐待、外国人、難民、避難民、少数民族、先住民族その他の社会的弱者に対する集団的暴力というおぞましいものを生み出している。」（『国連人権教育の10年（1995～2004）～人権文化を世界中に築くために～』：解放出版社、1995年 p.43）

このような観点から筆者が最も関心を寄せる問題は、チベット問題である。甚だ遺憾なことに、冒頭に触れた国連本部での「世界平和サミット」にダライラマ14世は出席し得ていない。世界各地から1000人にも上る宗教指導者が集結し、国際的な平和活動に宗教者が如何

に協力するべきかを話し合うサミットに、1989年のノーベル平和賞受賞者が参加し得ていないのである。24日付のロイター伝によれば、彼の出席は、中国との問題を引き起こす可能性がある故、中国側に配慮し、招待者リストから彼が除外された旨が伝えられているが、この事は、チベット問題がNGOですら解決困難な複雑な状況にあることを露呈したものとも言えるであろう。従って、早急に、チベット乃至チベット難民の実状を調査公表する必要があると思われるのである。

「人権・平和・環境」を布教教化方針に立て、その細項目の中では「あらゆる差別の撤廃」、「世界平和の実現」、更に「教義の実践である菩薩行としてのボランティア活動を推進する」事を明文化している宗門は、こうしたチベット問題をはじめとする世界情勢に関して、もっと積極的に見解を表明し、活動を展開するべきなのではなかろうか。

就中、曹洞禅を通しての国際貢献を一つの主眼とするSZIは、こうした国際社会情勢及び国連等の動向等に細心の注意を払うと共に、曹洞宗が国際社会で果たすべき役割について積極的に意見を聞かせ、更には他宗教との対話を深め、国際社会に於ける共通課題、乃至は仏教徒であるが故に取り組むべき課題等に、参加していくべきなのではなかろうか。その為に先ず必要なのは、曹洞宗が、どのような目的・手段・人材等によって国際貢献をしていくべきであるのかに関する具体的な理念の確立であり、それには海外布教経験者の方々の艱難辛苦によって培われた叡智が必須であろう。それ故にこそ、私は、他ならぬSZIの方々に、その理念の確立を果たして貰いたいと願って止まないのである。

尚、こうした論点に関しては、是非、SZIのインターネットホームページ上の掲示板で論議して頂きたいし、また、個人的な御意見・御指導等は直接私宛（chozenji@af.airnet.ne.jp）に送信して頂きたい。

国際公開講座速報 詩と禅の対話

ゲリー・スナイダー 禅を詩う

S Z I 事務局 新宿区大龍寺 太田 賢 孝



ゲリー・スナイダー氏の朗読

去る10月13日（金）駒沢大学記念講堂において、国際公開講座「詩と禅の対話 ゲリー・スナイダー 禅を詩う」が開催されました。高祖道元禅師七五〇回忌大遠忌局の文化事業の一環として計画され、大本山永平寺、駒澤大学、朝日新聞社が後援となり、当SZIからも人的な協力をさせて頂くことができました。

当初は参加希望の反応が芳しくなく来場人数等の心配もありましたが、開場前には何十人もの人が列を作られ、氏の講演を待ち望みにされていました。宗門の方丈様方、檀信徒の方、バックパッカー、外国の方、駒澤大学の地元世田谷の方、大学の学生、その他多くの方が駆け付けられ、最終的には1200人以上もの聴衆となりました。

氏の朗読に私が初めて触れたのは、昨秋開かれたスタンフォード大学での「道元禅師シンポジウム」でした。星が煌いている時には星が煌くように、木の葉が落ちていく時には木の葉が落ちるように朗読され、音韻や字数を揃える詩歌とは明かに違う世界に感激したものでした。そして今回、第一部ではシンボと同様に氏の朗読、第二部では奈良康明先生との対談という形でありました。

聴衆は終始リラックスした姿、顔をして舞台に耳を傾けていました。氏の声が耳に馴染む時、私はシェラの森に居ました。風が頬を撫でて吹き去る時、私は風となり、木間を縫い、葉々の音色を楽しんでいました。氏の心の世界、毎日の生活にある世界が、文字と声とメロディを通して、私の心に再現されたように感じた瞬間でした。世の中で「癒し」が注目されて久しくなりましたが、そんなブームに関わらず、自らの理想を生き方とする氏であるからこそ、人々はそこに「癒し」を感じているのでしょうか。



ポエトリー・リーディングをするゲリー・スナイダー氏

S Z I 動静報告

5月1日から8月15日まで

- 5月16日 会報編集会議
- 5月22日 役員会・大谷有為師一時帰国懇談会
- 6月28日 役員会、福井ユアーズホテル
- 6月29日 SZIワークショップ 大本山永平寺
- 7月17日 「ゆめ観音」打ち合わせ 大船観音
- 7月27～29日 大遠忌局主催「禅といま」
夏期大学へ協力

皆様のホームページ運営中!

SZIホームページでは、活動報告の他、皆様との交流の場を設けています。
SZI.BBS（掲示板）へのご意見・ご質問をスタッフ一同お待ち申し上げます。

<http://www.pa.airnet.ne.jp/szi/>

寄付者・会費納入者名簿

■SZI 会費納入者

新規会員並びに会員ご継続
ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

2000年5月1日～8月15日まで

赤間直道	仙台市	龍角寺
天野宏雄	加美郡	皆伝寺
荒井禮一	深谷市	昌福寺
有馬実成	徳山市	原江寺
石井和泉	大田原	玄性寺
石井清純	市川市	
石塚正道	飯能市	見光寺
磯貝昌隆	文京区	喜運寺
市川智彬	横浜市	興禅寺
市川明雄	府中市	観音寺
伊藤仁志	安房郡	瑞岩寺
伊藤禅龍	松前郡	法徳寺
伊藤道人	秋田県	満福寺
伊藤光津代	名古屋市	
伊藤良一	山形市	法祥寺
乾 宗俊	小田原	宗久寺
猪俣正孝	静岡県	高林寺
茨木兆輝	佐世保市	西蓮寺
岩井恵澄	富山県	東信庵
岩本昭典	文京区	吉祥寺
岩本英男	横浜市	
上村映雄	中野区	保善寺
鶴飼宏史	一宮市	禅林寺
永心寺	新宿区	
オーシャントラベル	豊島区	
太田宏見	青森県	宝積院
大谷俊定	亀岡市	苗香寺
大谷哲夫	新宿区	長泰寺
大場泰宜	世田谷区	勝光院
大場満洋	大宮市	
大森篤史	上尾市	東栄寺
大山陽堂	千葉県	海竜寺
岡島博司	豊田市	永沢寺
岡本莊一	中野区	龍昌寺
垣内善勝	葛飾区	萬福寺
柿沼仁法	行田市	龍泉寺
勝山星悟	坂戸市	
加藤孝正	富士市	永明寺
加納博人	愛知県	天徳寺
亀野哲也	横浜市	貞昌院
川橋範子	豊田市	
川村光司	世田谷区	駒沢大学高等学校
岸 世一	熊谷市	東竹院
岸本孝道	福井県	空印寺
北浦孝雄	兵庫県	昌福寺
木谷雅樹	渋谷区	瑞圓寺
来馬規雄	豊島区	高岩寺
黒木 靖	江戸川区	
黒田純夫	品川区	桐ヶ谷寺
黒田俊雄	大田原市	光真寺
黒田泰弘	大田原市	
慶松寺	山形県	
月宗寺	秋田県	
玄光庵	仙台市	
建明寺	群馬県	
小泉悟道	川口市	円通寺
穀蔵禅戒	天塩郡	清輪寺
小島孝尋	宮城県	大雄寺
斉藤勇雄	東田川郡	永鷲寺
佐久間頭一	京都市	
佐瀬道淳	島根県	松源寺

佐藤昭次郎	新宿区
佐藤黙童	西多摩郡
佐村隆英	飯能市
穴戸由布子	西白河郡
篠原鋭一	千葉県
柴田弘一	秋田県
柴田隆全	名古屋市
俊朝寺	港区
昌雲寺	伊勢崎市
乗福寺	伊勢崎市
随流寺	横浜市
鈴木昭一	静岡県
鈴木道雄	秋田県
鈴木豊子	中野区
鈴木包一	静岡県
鈴木恵美子	横浜市
関 光禅	千葉県
関岡俊二	多摩市
石夢工房	港区
善寶寺	鶴岡市
高田憲道	東海市
高橋秀雄	北埼玉郡
竹内博徳	吉川市
館 定道	富山県
館盛寛行	相模原市
田中哲彦	広島市
田中芳周	杉並区
田中隆道	熊谷市
田中良昭	港区
田村優子	岩手県
長年寺	群馬県
長福寺	岩手県
土居孝童	喜多郡
続 道雄	台東区
つばた書店	福井市
東栄寺	松山市
洞外文隆	三浦市
東昌寺	埼玉県
尖秀雄	足柄下郡
戸田規子	安城市
栃掘真・久子	平塚市
飛田正道	加茂市
永井成典	愛知県
仲井章史	板橋区
長尾龍心	野付郡
中小路岡道	舞鶴市
中野東禅	横浜市
中村栄佑	八戸市
中村見自	倉吉市
中村道雄	名古屋市
奈良康明	台東区
成田大航	京都府
西沢応人	豊島区
西沢宏道	新宿区
野口弘龍	台東区
橋本徳倫	富山県
長谷川崇信	西白河郡
長谷川昭雄	太田市
馬場義実	横浜市
林 辰哉	神奈川県
原田道一	岐阜県
原山浩昭	長野県
福島B S 観光	福島県
福嶋幸隆	杉並区
福田恵文	台東区
藤井和彦	新宿区
藤川享胤	鶴岡市
北条正興	茨城県

周慶院	
善通寺内	
長寿院	
東泉寺	
神蔵寺	
西光寺	
自性院	
青原寺	
林叟院	
第七心機塾	
観音寺	
高西寺	
宝珠寺	
広徳寺	
東泉寺	
全龍寺	
梅宗寺内	
聖光寺	
観泉寺	
報恩寺	
宝積寺	
瑞林寺	
玉宗寺	
本瑞寺	
吉祥院	
慈光院内	
淨心寺	
法音寺	
宝珠寺	
増福寺	
長福寺	
祥雲寺	
大乘寺	
大岳院	
威音院	
法清寺	
円覚寺	
祥雲寺	
宗参寺	
福壽院	
徳城寺	
常在院	
瑞岩寺	
倫勝寺	
延命寺	
正宗寺	
苔翁寺	
長泉寺	
東禅寺	
竜門寺	
般若寺	
龍泉院	

細川正善	耶麻郡
細川皓代	京都市
前田泰明	台東区
松永寛道	台東区
松本力也	清水市
水町宗典	千葉市
光山卓生	佐世保市
皆川広義	佐賀県
南沢道人	栃木県
峯岸正典	福井県
宮崎輝郎	群馬県
宮崎弘行	北高来郡
宮澤俊弘	山形県
宮田春光	松本市
棟方清允	名古屋市
村上直文	秋田県
森田英仁	北海道
安江英雄	千葉市
安野正樹	名古屋市
山喜光明	羽生市
山口義博	川口市
山口淳一	青森県
山田栄一	群馬県
山田康夫	日立市
山本健善	藤枝市
山本現雄	世田谷区
山本慧彊	亀岡市
横山敏明	世田谷区
吉岡棟憲	横浜市
吉田公雄	福島市
竜華院	盛岡市
渡辺孝彦	沼田市
松本誠諦	神奈川県
神野哲州	大宮市
淨仙寺	名古屋市
	東大和市

天徳寺	
宗仙寺	
出山寺	
海岸寺	
海蔵寺	
青眼寺	
医王寺	
常真寺	
永平寺	
長楽寺	
和銅寺	
延命寺	
正麟寺	
春江院	
大川寺	
禅昌寺	
(株)安江	
建福寺	
金剛寺	
保福寺	
(有)オモロ	
鏡徳寺	
盤脚院	
正誓寺	
世田谷学園	
西有寺	
円通寺	
祇陀寺	
種徳寺	
東光寺	
地藏寺	

■助成金

助成金ありがとうございました。

大本山永平寺様

大本山總持寺様

■SZI 特別寄付者

ご寄付ありがとうございました。

(敬称略・順不同)

2000年5月1日～8月15日まで

柴田弘一	秋田市	東泉寺
鈴木豊子	中野区	青原寺内
長谷川昌光	埼玉県	東昌寺
法徳寺	松前郡	
洞外文隆	三浦市	本瑞寺
佐瀬道淳	安来市	松源寺
藤川享胤	鶴岡市	般若寺
鈴木道雄	南秋田郡	自性院
市川智彬	横浜市	興禅寺
山田栄一	日立市	鏡徳寺
茨城兆輝	佐世保市	西蓮寺
大雄寺	宮城県	
中島達雄	新宿区	永心寺
関岡俊二	多摩市	高西寺
南澤道人	永平寺監院	
佐藤昭次郎	新宿区	
神野哲州	名古屋市	地藏寺